

アルヴァ・アアルトの空間構成について

—作品プランの分析・比較を通して—

1328 山田英徳

指導教員 教授 高宮眞介、 助手 佐藤慎也

1. はじめに

北欧フィンランドの建築家アルヴァ・アアルト (1898-1976) は、F・L・ライトを除いた近代建築の他の巨匠たちに比べ個性の強い建築を創ってきた。アアルトの個性の強い建築は、設計活動初期から見られていたわけではない。アアルトの活動初期では、当時流行していた北欧の新古典主義の影響からアアルト建築も古典の持つ秩序へと向けられその様相を持っていた。そして、次第にアアルト建築は、古典的な雰囲気似たものを持ちながら徐々に建築の次の段階の幕開けを予感させ、突如としてアアルトの建築に白い壁、フラットな壁面、水平連続窓が現れる。ル・コルビュジェの作品は若いアアルトに強烈な印象を与え、ごく素直にコルビュジェの造形を受け入れた。アアルトはコルビュジェの形式に自らの建築の突破口を見出し自分なりに発展させていった。その結果、新しいヨーロッパの近代建築の旗手としてのアアルトの位置をはっきりと世界に知らしめたパイミオのサナトリウムが完成した。1935年にはヴィープリの図書館が完成し、アアルトのパイミオのサナトリウムまでの作品は近代建築の消化の過程を意味し、この図書館を契機にアアルト自身の建築が発出したと言われる。

2. 研究目的

本研究は、アアルトの空間構成を1930年代以降(ヴィープリの図書館を契機にアアルト自身の建築が始まった時期)の代表作品のプランから比較、分析することとする。同じ時代の他の近代建築の巨匠たちの中で異才を放ったアアルトの空間生成の原点を調査、分析する。そして、アアルト特有の建築を空間の連続性、分節化、空間のつながり等の視点からより詳しく解き明かし、空間構成の特徴点を明確にする。さらに、各作品の空間構成の分析結果をデザイン(アアルトが設計を開始した時期)された年代から時系列に表記し、1930年代から建築家としての円熟期までの各作品の変遷及び、成長過程をその建築の特徴と照らし合わせて明確にすることを目的とする。

3. 研究(調査)方法

3-1. 調査対象

- i. ヴィープリの図書館
(1933 設計, 1934-35 建設)
- ii. マイレア邸
(1937-38 設計, 1938-39 建設)
- iii. セイナツァロの役場
(1949 設計, 1950-52 建設)
- iv. ウォルフスブルグの文化センター
(1958 設計, 1958-63 建設)
- v. フィンランドディア・ホール
(1962 設計, 1967-71 建設)

3-2. 調査(分析)方法

各作品のプランを中心に空間を機能ごとに色分けしダイアグラムを作る。色分けしたダイアグラムは平面図と合わせたもの(fig. 01)と平面図を取り除き、さらに空間を図形的に分かりやすくしたもの(fig. 02)との2種類とする。さらに、アアルトの建築に深く関わってくるものとしてフィンランドの歴史性、時代背景が挙げられることからそれらも関連づけて分析する。また、結果として明らかになったアアルトの空間特性を各作品ごとにまとめ、時系列に図化するという手法をとることとする。

4. 研究(調査)結果

4-1. 作品分析

【i. ヴィープリの図書館】

エントランスを入ると右手にカフェテリア、講義室が続き正面には階段があり1.45mの床に達している。その左には閲覧室に達するスロープがあり、さらに40cm高い床に達する。さらに真っ直ぐ行って右に曲がると90cm上がって貸出室中段に達し、そこから1.7m上がって貸出室の上段に達する。ここからは閲覧室と同じレベルまで降りていくことができる。

【ii. マイレア邸】

1階のリビング兼ホールや食堂、入り口、サウナ、2階アトリエ、寝室は独立した形態であり、外観からも認識できるぐらい顕著に表れている。各室の構成では独立した個々の空間同士が会う場所が存在している。それは大きなホール空間であり、1階ではホール兼リビングが分節された各空間の形態要素を調和させている。2階では子供のためのホール、1階から階段を上ってすぐのホールがそれである。

【iii. セイナツァロの役場】

官舎、官庁、図書館、議場等の主機能空間は形態的に異なりさらにその配置の独立性が見られる。また、これらの関係性を見ると、すべて中庭が接合点となり構成されている。さらに、この主機能空間は中庭の空間を取り囲んでおり、中庭を包むようなコの字型である。プランを見ると議場棟に入るのも図書館に入るのもすべて地上から階段をのぼって一度中庭を通って入るしかない。これは外部に対し閉鎖的である。

【iv. ウォルフスブルグの文化センター】

1階では多目的ホールを中心として各空間がホールを取り囲むように配置されている。さらに、エントランスホールの形態は多目的ホールに向かっていくように構成されている。2階では中庭が中心となっており、それを取り囲む講義室は扇形を円弧状に並べたような形態で中庭に向かっていく構成である。また、エントランスホールや多目的ホール、中庭は各空間を結びつけている。これらは様々な異なる機能をバランスを取り空間の調和を計る接点として存在している。

【v. フィンランドディア・ホール】

メイン空間であるコンサートホールと室内楽ホールの構成を見ると完全に独立して存在している。各ホールへの入口がかなり距離をおかれて設置されていることからわかる。3階のロビーは、2つのオーディトリウムの間であり、接合点として大小2つのオーディトリウムを結び合わせている。2階のレベルにおかれたエントランスホールは、この建物の中心に位置する。これは歩車分離である建物において1階から車で来館する人と2階から歩いて来館する人が交わる空間であり、ここから人々はそれぞれ各空間に向かう。

4-2. (作品) 分析結果

これまでの分析から5つの分析作品には、そのプランからいくつかの特徴的な空間構成が挙げられる。各作品に見られた特徴的空間構成は、空間の特性を表すキーワードとして一言に凝縮する。各キーワードは、文献からその意味に合うものを選考しキーワードとする。

- 1, 段階的なレベル差
- 2, 分節化
- 3, 中間空間
- 4, 内向的な空間
- 5, 中心性を持つ空間

結果として、上記の5つが空間構成の特徴点として存在していることが考えられた。

5. 考察

研究結果として明確になった5つの特性を設計時期と照らし合わせ表にまとめてみる (fig. 03)。fig. 03を見ると、アアルトは年を重ねるごとに徐々に空間の特徴とするものを生み出している。そして、それらの特徴は次第に建築に強く現れるようになり、晩年に設計されたフィンランディア・ホールでその特徴は、様々に融合しさらに明確に表現されたと言える。

各特性を見ていくとヴィープリの図書館では、見られる特性は段階的なレベル差だけである。これは、アアルトの独自の建築がまだスタートしたばかりであることが挙げられる。

次に分節化は、ヴィープリの図書館に見られず、他の4つの作品に現れている。ヴィープリの図書館と他の4つの作品との違いはヴィープリの図書館が単一機能建築であり、他の4つが多機能な複合建築である点である。マイレア邸は住宅だがアトリエやオフィスの要素も加わっている複合型の建築と言える。分節化という特性は複合建築にあって機能するのだと考えられる。

また、中間空間は4つの作品ではっきり現れており、「ホール」、「中庭」というものがアアルトの空間にとって、とても重要な役割を担っていたということがわかる。

6. まとめ

以上、この研究では、アアルトの5つの作品のプランから5つの空間構成上の空間特性が挙げられた。その特性はアアルトの建築家としての成熟に合わせて徐々に現れていると言える。そして、5つの特性はアアルトの成熟過程で次第に研ぎすまされ、強くなっていくことがアアルトの晩年の代表作品であるフィンランディア・ホールから示される。

7. おわりに

アアルトは、様々な機能の建築に見出した特性を使用していた。それは多くの文献で語られている「実験」というアアルトの試みの現れであると言える。本研究から導きだされたfig. 03の表は、アアルトの「実験過程の変遷」とも言えると思う。アアルトは見出した特性を様々に実験し各空間に合った特性、そして、「ホール」「中庭」のような中間空間の重要性を導き出したと考える。

最後に、この研究は用途の異なる建築をその対象としたが、用途を限定したりさらに対象作品を増やした上でfig. 03のように表にまとめていけば、その表からさらなるアアルトの空間特性やその変遷が発見できるだろうと本研究を通して認識した。

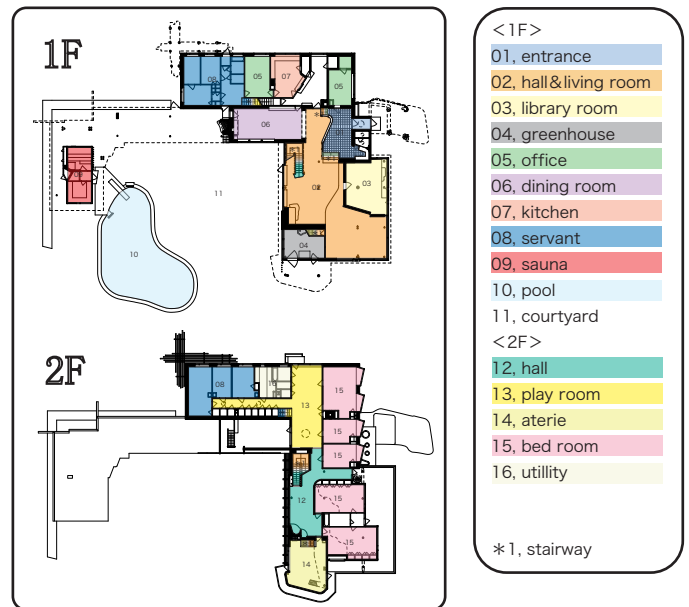


fig. 01 分析作品例—マイレア邸平面図ダイアグラム

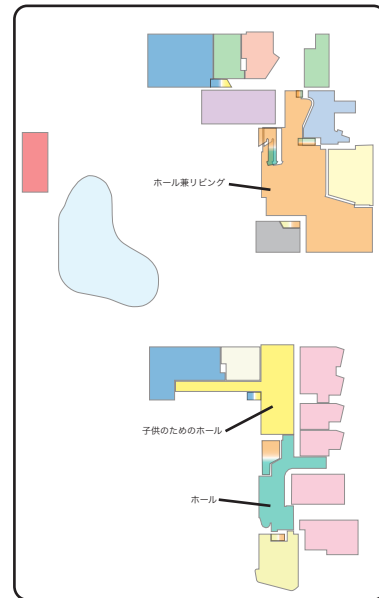


fig. 02 分析作品例—マイレア邸ダイアグラム

	段階的なレベル差	分節化	中間空間	内向的な空間	中心性を持つ空間	設計時期
ヴィープリの図書館	○	×	×	×	×	1933
マイレア邸	×	○	○	×	×	1937-38
セイナツツアロの役場	×	△	○	○	△	1949
ウォルフスブルグの文化センター	×	○	○	△	○	1958
フィンランディア・ホール	×	○	○	×	○	1962

fig. 03 各作品の空間特性をまとめた表

記号○：空間特性が強く見られた作品
△：空間特性が見られた作品
×：空間特性が見られなかった作品

【参考文献及び、参考論文】

- 1) SD選書34 アルヴァ・アアルト, 武藤章, 鹿島出版会, 1969
- 2) 《現代の建築家》アルヴァ・アアルト, SD編集部, 鹿島出版会, 1978
- 3) アルヴァ・アアルト作品集 第2巻, エリサ・アアルト カール・フライク, A. D. A. EDITA Tokyo Co., Ltd., 1979
- 4) 白い机: 若い時—アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想, ヨーラン・シルツ, 鹿島出版会, 1989
- 5) 白い机: モダン・タイムス—アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い, ヨーラン・シルツ, 鹿島出版会, 1993
- 6) 白い机: 円熟期—アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ, ヨーラン・シルツ, 鹿島出版会, 1998
- 7) セイナツツアロの役場, リチャード・ウェストン, 株式会社 同朋舎出版, 1994
- 8) a+u建築と都市 アルヴァ・アアルト作品集, 武藤章 樋口清ら他7人, 株式会社エー・アンド・ユー, 1983
- 9) 20世紀の建築, リチャード・ウェストン, 丸善株式会社, 2003
- 10) アアルトの個別的な機能と構成の概念, 多田 奨 鈴木一, 日本建築学会大会学術講演梗概集1997
- 11) 3住宅におけるフォームの意味, 前田忠直, 日本建築学会大会学術講演梗概集2000
- 12) アルヴァ・アアルトの言葉について, 前田忠直, 日本建築学会大会学術講演梗概集2001
- 13) アルヴァ・アアルトの曲面形態(1), 西原信一郎 黒澤友三 天野慶一 野村俊一 田路貴浩, 日本建築学会大会学術講演梗概集2003
- 14) アルヴァ・アアルトの曲面形態(2), 西原信一郎 黒澤友三 天野慶一 野村俊一 田路貴浩, 日本建築学会大会学術講演梗概集2003